

二〇二四年度 一般入学試験 問題 (国語)

造船会社の社員であった河辺龍一氏は癌がの末期に山崎章郎医師のホスピスに入院した。妻の貴子氏はその療養の日々を、自らの思いを込めて日記風なミニ新聞として病室の前に掲示した。次の文章は、そのミニ新聞の書籍化の際に、山崎医師によって添えられた文章である。本文を読んで、後の設問に答えなさい。(なお、設問の都合上、文章を一部省略したところがある。)

(本文)

ホスピスで東の間の穏やかな日々を過ごされた患者さんたちにも、やがて病状の進行にともなって、あらためて自分の厳しい現実<sup>じじつ</sup>に直面せざるを得ない時がやってくる。誰もがその時がいつか来ることを予測し、しかしかなうことなら、できるかぎりゆっくりと来てほしいと願っている時がやってくるのである。

もちろん、耐えがたき病状の中で苦悶している事態であれば、一日でも早くお迎えが来ないかと願っている人もいる。死は別離の悲しみであり、この世を去ることの不安や恐怖の **a** ショウチョウでもあるけれども、長い闘病の末に訪れる安らぎや解放の時でもあり、人によっては新しい世界への希望に満ちた旅立ちの時でもあるからだ。ある時、六〇代の男性の患者さんに「このようにつらい状態はいつまで続くのですか」と問われたことがある。その方の病状はとても悪いものであったので、私は「残されている時間は日の単位で考えてくださったほうがいいと思いますよ」と答えた。するとその患者さんは、にっこりと微笑み「それは私にとって **b** ローホウです。ありがとうございます」と言った。私はそのことを **c** センメイに覚えている。

それでも苦痛症状が軽減され、日常のささやかな出来事に楽しみや喜びを見いだせた患者さんたちにとっては、やはりその時はゆっくりと来てほしいのである。もちろん、喪失の不安の中で胸の **d** フサがれるような日々を過ごす家族にとってもである。

しかし、死を実感せざるを得ないような現実が訪れてきたことを、多くの患者さんたちは自分の身体的な変化を通して知ることになる。例えば、それまで大変ななりにも自分でできたトイレ、入浴、食事などが一人では難しくなってきたりした時などである。つまり誰かの力を借りなければ、それまでの日常性を **e** イジすることができなくなってきた時なのである。

これは患者さんたちにとって大きな転換点になる。不自由ななりにも自分でできるうちへと頑張り、日々の出来事を大事にすることによって自分を保ってきた方たちが、自分が存在し続ける意味を見失う時でもあるからだ。

そのような患者さんたちの中には、「もう終わりにしたい」とか「早く楽になりたい」と口に出し始める人もいる。その理由は次のようなものである。「私は自分がこの病気になることから、**へ1**。それでも治癒することが難しい状態と分かっていたから、いつかこの日が来ることを覚悟し悔いの無いように生きてきましたし、身の回りの整理もしてきました。**へ2**。**へ3**。ですからもう十分なのです。**へ4**。これから先は皆に迷惑をかけて生

きるだけだし、この状態が続くのはとても惨めです」だから「もう終わりにしたいのです」ということなのである。

患者さんたちのこのような思いを私は理解できる。同じような状態になれば私もそう思うだろう。だが、だからといって「それではもう終わりにしましょう」などと言えるわけも、できるわけもない。①このような場面でこそ、我々は患者さん自身の存在の意味だけでなく、我々自身の存在の意味を問われてくるのだ。それでは我々はこのように「自分が存在し続ける意味」を見失ってしまった患者さんにいったい何ができるのだろうか。

ほとんどの場合、具体的な解決策など提示できない。しかし、患者さんのそばに座り、患者さんの身に自分を重ね合わせながら（とはいっても、患者さんの身に成りきることで決してできはしないけれど）、患者さんの話に耳を傾けることはできる。患者さんの苦悩に思いを寄せることもできる。時には、患者さん自身が諦めてしまい、絶望的な気持ちになってしまっていることが、解決可能なことであることに気づき、その解決と一緒に考えることもできる。患者さんの言葉や考えを評価したり、修正したりせずに、あるがままの患者さんを受け止めることもできる。

あるいは患者さんが羞恥を感じたり、申し訳ないと思うような場面での日々のケアを誠実に「**テイネイ**」に継続するそのケアの姿勢や態度を通して「どんな状態でも、あなたは大事な方なのですよ」と伝えることもできると私は考えている。

ところで患者さんが自分の存在意義を見失ってしまったような状況では、そのご家族もどう患者さんを支えていけばよいのか分からずに、患者さんと同じような絶望的な苦悩の中にいることが多い。ほとんどのご家族にとって初めての体験なのであるから当然のことである。このような時にはホスピスタッフはご家族の苦悩にも耳を傾け、共に考え、時にはアドバイスしながら患者さんに関わっていくことが大切なことだと知っている。ご家族は患者さんの苦悩に対して、戸惑いながらも「そんなこと言わずに、もつと頑張つて」と励ましてしまうことが多いからだ。しかし、自分でももうどうしてよいか分からないほどに追い詰められて「もう終わりにしたい」と考えている患者さんにとって、「もつと頑張つて」という励ましは鞭のような言葉になって、さらに患者さんを追い詰めてしまうだろう。

ご家族にも患者さんの思いや言葉があるがままに受け止め、耳を傾けていくことの大切さをお伝えしている。そのことよって、患者さんにはご家族が自分の苦痛や苦悩を少しでも受け止めようとしていることが、あるいは少しでもそれら苦痛や苦悩を共に担おうとしていることが伝わっていくからだ。そして、それらは結果として患者さんを支えていくことになるのだ。

もし以上のような関わりの中で患者さん自身に「自分はこんな状態でも愛されているんだ。存在し続けてもいいんだ」と「自分の存在の意味」を再発見していただけたら、こんなに嬉しいことはない。しかし、いずれにせよこの問題は最終的には患者さん自身が自分で解決していくことになる。再び存在の意味を見いだすことができる。「もう終わりにしたい」などと口にすることもなく、最期の時まで短い日々をご家族や周りの人々との交わりを大切にし、穏やかに過ごすようになる患者さんたちも少なくない。

あるいは別の患者さんたちは、自分の死が近いことを実感するようになってくると、自分分は死んだあとどうなっていくのだろうという不安に「**g** オソ」わられてくる人もいる。この

まま、ただ消滅してしまうのだろうか。それとも肉体は滅んでも魂は残るのだろうか。死後の世界は、天国はあるのだろうか。愛する人々との別れの予感の悲しみの中で、さまざまに思いに眠れぬ時を過ごすことになる。

ところで、それまで自分の身体に起きた出来事をしつかりと受け止め、貴子さんと共にその時点時点でのベストと思われることをみつけ、悪くなりつつある状況の中でも、しつかりと前を見つけてきた龍一さんも、魂の不滅については半信半疑の状態で思い悩んでいた。しかし、死を実感し始めた人々にとってこれは重要な問題である。ある日の夜、不安そうな面持ちの龍一さんから「先生、これまでの皆さんは②ここをどう渡っていったのですか」と問いかけられた。自分のiのままにならぬほど弱ってきてしまった肉体の変化の中から、もう時間がないことを悟った龍一さんは、それまでの前向きな姿勢をhクズすことなく、今度は必死になってこの時から死までのプロセスをなんとか受け止めるための準備をし始めていたのだ。みごとと言うべきなのだと思う。しかし、このプロセスは誰にとっても初めての体験なのであるから、実際はどんなに迫ってくる最期の時までを、どのように過ごしてよいのか戸惑い、徒らに時間だけが過ぎてしまうといったことも起こりうる。

だからこそ、他の方はここをどのように渡っていったのですかと、たぶん追い詰められたような気持ちで、しかし勇氣を出して質問してくださったのだと思う。

私は龍一さんの顔を見つめながら、すでにこの世を去っていった患者さんたちを思い起こしていた。さまざまな方の顔が次から次に浮かんできた。この聖ヨハネホスピスにiフニンしてからのあしかけ九年の間に、九〇〇人近い患者さんと出会い別れてきたのだから当然のことだ。

私のjノウリにはその中のお一人、龍一さんと同年代の男性の患者さんがクローズアップされてきた。そして、河辺さんご夫妻と同じように四〇代その患者さんご夫妻とある日の夕刻の出来事をお話してみることにした。

その患者さんは消化器の末期がんで、痛みのコントロールを求めてホスピス外来に通院していた方だったのだが、やがて病状が悪化したためホスピスへ入院することになった。亡くなる一週間ほど前のことである。その頃になると衰弱のため彼は一日のほとんどを横になって過ごしていたが、意識ははっきりしていた。会話の流れの中で、彼は突然「ところで先生は死後の世界を信じていますか」と問いかけてきた。そこでしばらくの間、彼ら夫妻と私は死後の世界は存在するかどうかについて話し合うことになった。私と彼の妻はあるかもしれないと言ひ、彼はあると思うと言った。そして、彼は残される立場である我々に、死後の世界から、彼からの知らせである次の方のようなサインを送ると、いたずらっぽい笑みを浮かべながら約束してくれた。彼は「もしも、風の無い日にろうそくの炎が揺れたら、それは私が揺らしたのだと考えてください」と言ったのだ。彼の死後、彼の妻も私もろうそくを見るたびに彼のこの日の顔を、声を思い出し、小さく揺らめきながら辺りを灯するろうそくの炎が、さらに大きく揺れる日を待つようになった。

以上のような話をしながら、私は龍一さんに彼は死後の世界の存在と魂の存在を確信していたようだと伝えた。その他にも死期が迫ってくると少なからぬ人が、死後の世界の存在をiiの端に出し始め、死後の世界での再会を希望することなどもお話した。つまり、③死を実感するような時期に多くの人が感じ始めたり、話し始めることがあると

すれば、それは実体として証明されなくとも、真実であるかもしれないということなのだ。「だから、まだ確信はもてないのですが、死は肉体の終わりではあっても、魂は残り、我々はまたいつの日か魂と魂との再会ができるのではないかと少しずつ思えるようになってきているのです」と結んだ。その時、龍一さんの目が光がともったように輝いた。そして、うなずいてくださった。

以上のように病状が悪化し、いよいよ死が差し迫ってきたことを実感するようになると、生き続ける意味を見失ったり、死までのプロセスに恐怖や不安を感じたり、死後の世界や魂の存在について考えたりするようになる人は少なくない。

我々ができることはどのような場面でも逃げることなく、患者さんのありのままを受け止め、誠実に最期の時までご家族ともども同行していくことだと思う。そのプロセスの中で患者さんは自分を包み込む<sup>iii</sup>を感じ、どんな状態であったとしても、その終わりの時まで堂々と存在し続けていいんだと思えるかもしれない。あるいは、次の世での再会を確信することによって、死までのプロセスを乗り越えていけるかもしれない。

(『河辺家のホスピス日記 愛する命を送る時』より)

(注)

\*ホスピス＝癌などの末期患者が入院する施設で、苦痛を和らげ、家族・知人との触れ合いのもとに平穏な死を迎えさせることを目的とする。

(設問)

問一 a j のカタカナを漢字になおさない。

問二 本文を、意味内容から大きく三つの大段落に分けるとすると、第二、第三の大段落の始まりはどこか。それぞれの大段落の最初の五字を記しなさい。

問三 空欄〈1〉〜〈4〉に入れるのにふさわしい文章を、次の選択肢の中から一つずつ選んで、その記号を記しなさい。

- ア 家族とも十分に話し合ってきました
- イ 何よりも、もう死がそこまで来ていることが分かるのです
- ウ なんとか打ち克ちたいとさまざまな治療を受けてきました
- エ 私は幸せだったと思うし今も幸せなのです

問四 傍線部①「このような場面でこそ、我々は患者さん自身の存在の意味だけでなく、我々自身の存在の意味を問われてくるのだ」について、本文の趣旨によると、自身の存在の意味を見失った患者さんに対する接し方として、どのような点が重要と言えるか、六〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部②に「ここをどう渡っていったのですか」とあるが、本文中に「ここ」を言い換えた表現がいくつかある。十字以内で一つ抜き出しなさい。

問六 空欄①②③に入れるのに最も適当な漢字一字の言葉を、本文中に使われている漢字から一つずつ選んで記しなさい。

問七 「魂」の存在について、山崎医師は傍線部③で「死を実感するような時期に多くの人が感じ始めたり、話し始めることがあるとすれば、それは実体として証明されなくとも、真実であるかもしれないということなのだ」と説明している。この判断の仕方について説明した次の文章の空欄「I」「II」に最も適当な言葉を、後の選択肢の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

山崎医師は、多くの例があることから、「I」法的に推論し、魂の存在には「II」性があると考えている。

- I ア 演繹      イ 帰納      ウ 三段論      エ 弁証  
II ア 蓋然      イ 必然      ウ 必要      エ 物語

問八 次の文章は、山崎医師に宛てた貴子さんの手紙の一節である。これによると、貴子さんは魂の存在についてのどのように考えているか、理由を含めて五〇字以内で簡潔にまとめなさい。

夫が逝った二七日の夜、病室で「真上」を向いて眠る夫を長崎の母にお願いし、私は家族で眠らせてもらうことにしました。ホスピスでの最後の夜を親子で過ごしてもらいたいと思っただけから。そして長い闘いがおわって、私は何かホッとしましたから、です。

長い三年間でしたし、長い二日間でしたから。  
私が二階に上がったのは一二時近くでしたが、部屋に入り「龍一さんお疲れ様でした」という言葉が自然にこぼれた途端、私の全身は、これまで経験したことのないあたたかさ

（ちよつといやしい例えですが、ジュンサイのまわりのヌルツとした感じのような……）それはそれはあたたかくて優しいベールでした。きっと彼は私が一人になるのを待ち構え、「貴子もお疲れ様でした。ありがとう」と言いに来たのだと思います。魂の存在。現実体験しました。と、思います。

そして、今日、長崎で確信を深めました。  
三菱重工長崎造船所の門を入ると、初めて訪れる場所なのに優しい思いがし、涙があふれそうになりました。仕事をもっとしたかった、と言っていた夫がついてきているのかな、と思いました。各部署であいさつやら手続きがあり、最後に彼の働いていた課に参りました。窓の外はすぐ海で、彼らが造っている大きな船が目の前に浮かんでいるのを目にしたとき、葬儀後はあまり出なかつた涙が止まりませんでした。私の涙ではありますが、私だけの涙ではないような。

それで、少し勇気の必要な行為でしたが、二人でよく歩いた所を一人で歩いてみました。初めて私を故郷に連れて帰り、嬉しくて嬉しくて連れていってくれた場所へ。  
やはり、思い出の場所に近づくと心がふるえ、涙があふれるのです。私自身が在りし日

の夫を思い出して悲しくて泣いている、というのとは少し違う感覚です。ある場所に来ると、夫の魂と私の中の夫が出会い、共鳴しているのではないだろうか……。

もちろん、悲しいことは悲しいのですが、再び夫と出会い、「もっと二人で散歩したり、話したりしたかったね」と会話をし、悲しさを共有しているといった感じなのです。